

「帝国大学言語学」の射程

——上田万年から金田一京助へ——

安 田 敏 朗

安田でございます。大勢の前で話をするのは久々でして、大学の講義では今年は人が少なく、この間は一人しか来なかったのですが、久しぶりに大勢の人の前で話すので、少しは緊張しております。

レジュメの文章ですが、ミスで注が飛んでしまっていますので申しわけございません。補いながらお話をしていきたいと思います。申し上げたいことは極めて簡単でして、先ほどの丸山先生のお話にもつながるのですが、何で金田一はそんなに薄情であったのか、ということをし少し難しい言葉で話すだけのことですが……。結論だけを申し上げますと、金田一が信じていた言語学というものはそういうものであったのだということになってしまい、身もふたもない結論ですが。

まず、「はじめに」、というところからご覧いただきたいのですが、晩年77歳の時に金田一が講演をしているのですが、そこでアイヌ語研究の動機について、このように述べています。「国語の研究が志望であった」と。金田一が東京帝大の言語学科に入るのが1904年のことですが、「世界の言語の中における日本語の地位・系統ということを考えたかったがために国文科を選ばずに言語学科に移った」と。先輩にあたる人たちと語っていく中で、「日本語をとりまく周囲の言語を、まず日本語と比較して、それらと日本語が、一々どういう関係に立つかを、手始めに、明らかにすることが必要であるが、一人でもっと諸国語と国語との比較研究をすることは浅い程度の研究しかできないので、銘々専門を分かとうじゃないか、ということになって……アイヌ語と日本語との関係で、まず第一に、すぐにでも解決しなけりゃならない問題でもございましたけれども、ほかの諸国語には古い言語資料もあり、いろいろな学者の研究もございますから、それを調べることは容易でもあり、興味のあることでございます。アイヌ語の方には文字がございませんため、古いアイヌ語の資料がありません、したがって、単に今日、アイヌ人が話していることばをアイヌの口真似をしてしゃべれるようになる程度の勉強だったら、つまらないのみならず、実際上の必要はもはやなかったのです。なぜならば、どこの村里に行きましても、どんな山奥に行きましても、一人としてアイヌ人に日本語の通じないものはなかったから」というわけですね。先ほどのお話にもつながることですが、アイヌ研究の第一人者と言ってもよい金田一が、アイヌ人が話している言葉を勉強するのはつまらないと平然といいはなつことができた理由というのを、まず探っていこうということに私の話の主旨があります。

2に行きますが、上田万年は東京帝大の言語学、あるいは、国語学の基礎をつくった人と言ってもいいのですが、その人の言語学の講義が金田一にとってのアイヌ語研究の契機である、というふうに彼自身が言っております。これは1968年の回想、『私の歩いてきた道』という本です。言語学の時間に上田先生が、「アイヌは日本にしか住んでいないのだから」（そうではない

のですが、当時)「アイヌ語研究は世界に対する、日本の学者の責任なのだ。それをやる人がいないということは……」と慷慨されたとき、私はビリッときたのです。それでアイヌ語に注意していた。……というふうに回想をしています。結局は上田の「啓示」ですよね。それによってアイヌ語の研究を志したというふうな語りかたになっております。

金田一が上田の講義を聴講したのは1904年から、翌年4月までの言語学でありました。そのノートは残っていないのですが、上田の1896年度と97年度の「言語学(博言学)」の新村出という人のノートが残っております。1896年度の「博言学」の講義の中で、日本帝国大学言語学ニ就テ……今日の報告のタイトルにしましたが……というところを述べております。これは、どういうことかと申しますと、日本語の語族を定めていこうと……「Indogerm.,Semitic,Ural-alt.,Indo-Chinese等ノ大familyアル中ニ、日本語ハ何レニ属スベキカニ付キテ、日本語ハ北ハCorea, Manchu, Chinese, 西藏, 印度, Ainu語で、南ハMalayo-Polinesian等ノ言語ヲ研究セザル可ラズ」ということです。

「而シテ我が大学言語学ノ講座ハ、之等Oriental Philologyヲ研究シ、日本語ノ位地ヲ定ムルsideニアリ。」手法としては、欧州学者のauthorityを踏まえて、「而シテ其、方ニ於ケルmeansナドハ十分取テ以テ用ユベキモノ」である、と講じたのです。

金田一が先ほどの講演でも言っていましたように、「世界の言語の中における日本語の地位・系統」を考えたかったという部分と上田の講義のこの内容は一致しております。つまり、アイヌ語研究は日本の学者の責任というふうに上田が触れたのですが、「言語学」、「国語学」と異なる「日本帝国大学言語学」という特別な名称を作って、日本語の位置を定めるのがその目的なのだというふうなことを上田が言っていることに注意していただきたいと思います。

金田一が「銘々専門を分かとうじゃないか」という点について、同じく1968年の回想から引きますが、金田一の一学年上には、橋本進吉、小倉進平、伊波普猷という人たちがいました。橋本進吉は学校文法に「橋本文法」がありますが、古代日本語の研究と国語史の業績もある人です。小倉進平は朝鮮語学で、これについて私は『「言語」の構築』(三元社)という本を書きました。伊波普猷は琉球語の研究をした人です。その3人の態度は当時からりっぱで、すぐ親しくなり話し合ってみると、どの人も日本語学のための言語学だったのです、ということを行っています。そして、日本語の起源はどうかとか、世界のどこに日本語と同じもとから分かれた言語が話されているか……と言っていたわけです。それで、日本語をとりまく諸国語と、日本語との関係を明らかにしていかなければならない、というわけで橋本などからはそれぞれの専門がすでにあったわけで、だれかが日本語とアイヌ語との関係をとらなければならないということは明らかだったと。アイヌ語にはだれも手を出さなかったということですね。これら少壮の学生たちがいた1904年前後上田は忙しかった。上田万年が学問的に何かすごいことをしたということは実はないのです。制度的に色々な基盤をつくった人です。上田がヨーロッパの言語学を紹介し、啓蒙的だった言語学がこの時期の弟子たちによって具体的に消化されていったわけです。それが、上田が構想した「日本帝国大学言語学」という図に沿って弟子たちを配置していったというふうに見ることも可能だと思います。

丸山先生が、後藤朝太郎という人が「シナ語」を選んだために、消去法的にアイヌ語を選択しただけだと指摘されています。上田からしましても、金田一がアイヌ語をやる必然性はなか

ったと言ってもいいわけです。「残余」としてのアイヌ語となるわけで、残りものというかたちでアイヌ語を選んだというふうにもとることができます。この選択を下敷きに石川啄木から「一体アイヌ語をやって何になるんです」と詰問されて、「あんな哀れなアイヌ語を調べても、もともと国語の研究の為であり、国語の研究は、日本文化の再認識であり、日本文化の再認識は、我々の現実生活を深く正しく解釈する所以であって、即ち我々の明日の生活を考える唯一の道だというような理屈を叩いて」、反論したということがあります。これは1934年の『石川啄木』という本で金田一が回想しているものですが、丸山先生のご本にもありますように、上田万年の意図をそのまま理解しているものであって、上田の意図というものは「金田一には明確であった。」「上田の意図」とは、日本語の「周辺」言語を語ることによって空白の中心を描き出す。実は、日本語が何かを確定するためには、日本語ではないものを確定しなくてははいけませんよね。その他の日本語でないものを研究することに「日本語とは何か」ということを逆証さすという意味での研究ではないかというふうに捉えることができます。

余談になりますが、系統関係を付けるということは、言語学者の意図を越えて政治的な意味をもってしまいます。例えば、金沢庄三郎という人が『日韓両国語同系論』というのを1910年に出すのですが、その年は韓国併合の年で、金沢は日本語と朝鮮語は同系関係ということを主張するわけですね。学問的には証明できないのですが……。そういう主張が金沢の意図を越えて、植民地の国語教育などで利用されるわけですね。つまり、日本語と朝鮮語は同系なのだから、朝鮮人が日本語を学ぶのは簡単なことだということです。それは官僚たちが言うことです。逆に金沢は日本語と朝鮮語は同系だから、日本人が朝鮮語を学ぶのは簡単なのだということを書いてはいるのですが、そういった話は教育の場面では生かされず、「同系なのだから日本語を学べ」ということのみがひとり歩きをするという動きがありました。系統関係を付けるということの政治性というのはこういうところにも表れてくるということです。

比較言語学は上田万年がヨーロッパからもって帰ってきた当時の流行の言語学だったわけですが、国語学の国家主義的な、あるいは、政治的な側面が強調されている。他人ごとのように言っていますが、強調しているのはしゃべっている私でもあるのですが……。確かに国民国家形成と国語の確立とは密接不可分な関係にあって、そこに学問としての国語学が関与したことは否定できません。この点は強調しすぎることではないですが、「日本帝国大学言語学」の政治性にしても同じことが言えるわけです。上田が国語愛を強調して、国民国家日本への無私的愛を説き、国語の通時的・共時的構築に尽力した一方で、まっとうな学問・科学として国語学を定着させようとも努力していたことも、強調しなくてはならないと思います。上田にとっての国語学とは江戸以来の国学系統の学問ではなく、日本語に関する言語学的研究ということでありました。

ただ、科学と政治というものは上田のなかでは矛盾していないと思います。つまり、政治の潮流に親和するには、学問に科学性・合理性がなくてはならない、というふうに上田は考えていったと思うのです。上田の弟子の保科孝一という人は、上田の死後に追悼の記事が特集されるのですが、その中で、「学者的政治家」ということを平気で言ってしまう。今こういうことを言われるとすごくいやな感じがしますが、「学者的政治家」というふうに上田をひと言で称していますね。言語教育行政にかなり関与していたわけで、政治に関与するには、ある程度合

理性がないといけないと上田は考えていたわけです。言語政策に関与していくことも、上田にとっては合理的な介入であったというふうに思います。

1933年になりますが、『国語科学講座』というものが刊行される時に、上田が刊行を祝した文章を書いています。江戸時代までは、国語学とは華道・茶道の如くして、伝授の道によって進んできた。だけれども、明治になってチェンバレンなどが革新をもたらしたと。「比較研究なしに、科学は勃興しないものと思ふ。私はそれらの諸先生の感化を受けて、明治年間に於て、いさゝか斯の道に尽力したものである」が、苦労したと。それから40年ぐらい経った時の回想なのですが、上田の他も含めた科学というのは、比較研究であるということがここで明らかになります。

上田は続けます。「国語学を一個の科学としてみる時には、人類学・人種学等と同じく、世界の人類、言語の学問と同じく、この言語と人類との関係が、如何なるものであるかを研究せねばならぬ。日本人の話す国語は、世界の人類の話す言語と如何なる関係に立つかを研究せねばならぬ。」そして、「国語を研究し、国語の歴史・性質を闡明し、世界の言語上に於いて、日本語の有すべき地位を確定することは、学者としてなさねばならぬ高尚な研究である」、ということをおっしゃっています。

比較研究こそが科学であり、他言語との位置関係を確定することが言語の科学であった、というわけです。同じ文章では、日本人が、国語学を興し、国外にまでも発展する方法を講じなければならぬとも述べています。33年ですので、満州国ができた翌年です。そういうことも入れているわけですね。科学も政治から中立であるべきだと言いたいわけではないのですが、両者が絡まった中で、実際アイヌ学が浮上してきたということを確認したいと思います。明治期は上田の記述だけ見ていると、比較言語学礼讃の時代であったかのようでありますが、ただ、金田一が上田の「言語学」を聴講したのと同じ年度に聴講した新村出の講義があります。これには金田一が持っているノートが復刻されておりますので読むことができます。新村は1933年に『言語学概論』という岩波講座日本文学の一冊として出たもののなかで、かなり率直な批判をしております。

上田と師弟関係がないので、この時期を客観的に語るにはふさわしい人だとは思いますが。「本邦に於ける西洋言語学並びに音声学の祖述者の諸説は、輸入当初より往々直ちに国語運動の所為の原則として之が軽率に用ゐられた嫌ひがないでもなかった。……ともすれば利用厚生的に能率本位的に言語学が使はれたやうな場合がなかったとも云はれない」とか「……比較言語学の皮相が伝はって国語と他国語との無造作な比較研究を促がし……日本語と同系語とを比較する所の比較言語学を言語学の主要部と考へたがる傾がある。……明治30年代の日本の言語学会には、表面狭義の比較学風が漲ってゐた」というように述べている。

さらに明治30年代に日本人の起源論が流行ったわけですが、その流行ともあいまった日本語の系統の研究というのがあったという指摘が続いております。「表面狭義の比較学風」とか「国語運動の所依の原則」ということなどについて、言語学を使っていったという、かなり痛烈な批判がありますね。これは明示されていませんが、上田への批判であったと言ってもいいと思います。一方で、上田の「功績」として東京帝国大学に国語研究室を置いたということを挙げて、もうひとつが、後進を育てたというようなことを言っている。それがひとつの「功績」で

あると。さらにヘルマン・パウルという人の『言語史諸原理』（1880年刊）、これは講談社学術文庫の『言語史原理』というので現在翻訳で読むことができます。この原書を輪読していったという点だけでも上田の功績は忘れてはならないということです。ただ、上田の学問的功績は全然ふれていないですね。研究室をつくったということと、ヘルマン・パウルの読んだということが上田の功績だと。ちょっとかわいそうな気がします。そういうふうな批判をしているわけですね。

系統論という時勢に便乗して流行した議論ではなく、比較言語学の大前提である歴史言語学の基本書、ヘルマン・パウルの『言語史原理』のことでありますが、それを紹介しただけでも評価すべきだということでもあります。つまり、パウルは「言語の史的変遷をあきらかにすることが科学だ」と。拙速に諸言語との系統関係を明らかにすることではなく、比較言語学よりもその前提である史的変遷を明らかにすることが科学だというふうに言っています。「言語学はやがて言語史である」というふうにパウルは言うのですが、それは穏当にみえます。

金田一の回想では、上田の「日本帝国大学」への射程の中でアイヌ語研究をおこなったかのようにふるまっております。つまり、アイヌ語と日本語との関係を見ていこうということです。しかしながら、金田一が「魅了され傾倒」した（金田一春彦が言っていますが）という新村出の講義「国語学概説」では明瞭に「Ainu語は日本語ト、系統上ノ縁故ナキモノナリ」と断定されています。おなじく「国語研究法」という講義では、「国語の研究法は歴史〔的デアルベキで、〕ナルベク假定ノ沿う想像ヲ設ケテハイケナイ。ドコマデモ証拠物件ヲ具ヘテ、ソノウ上から論ゼネバナラヌ」と。その方法としては文学とか方言とかを使うべきであるというふうにパウル流の歴史研究を新村が重視していて、それを金田一も重要視していたと思います。そういうことが科学であるということで、アイヌ語に向き合った時に金田一は何を考えたかというのが次の話です。

1927年の論文。これは、「語法上から見たアイヌ」という『人類学雑誌』の42巻11号に載せたものです。「言語は歴史的事実である。従って一民族の言語の科学的研究は、どうしても歴史的でなければならない筈である。然るにアイヌには文字がなく、アイヌ人の記録しておいてくれた何等の文献も金石分も無い。これは、アイヌ語の科学的研究にとっては殆んど致命的な痛みである。ではアイヌ語は遂に、科学的な研究が出来ないか」ということを言うわけですね。「幸にして、アイヌは、非常な豊富なフオルクロアを所有してゐてくれ、その神話伝説は、今のうちならまだ殆んど無尽蔵と言つてもよいくらゐ、彼等の口に、樺太でも北海道でも伝承されてゐる」というふうに言うわけですね。

まず、金田一は、科学的研究から歴史的研究へくる、というふうに言うわけですね。比較をする言語を構築しなければいけないわけですが、歴史的にもさかのぼることのできる「祖形」を構築した上で初めて比較が成り立つわけです。例えば、新村はインド・ヨーロッパ語族の比較が可能なのは三千年以上の古言が保存せられているからであり、日本語の周辺言語をそうしたことは困難だと明言しています。アイヌ語と日本語との言語学的系統関係はない、と論じ続けていく金田一ですが、先ほどの丸山先生のプリントの中にもありましたが、「アイヌ語は日本語と関係があってくれたら好いのである。若し同じ元から分かれた姉妹語でもあってくれたら、この間に比較言語学が有望になって来、それに由って、分岐以前の日本語、即ち文献も金

石文も遺らぬ悠久な太古日本の言語へ遡って行くことが出来て、アイヌ語研究も、今より、より遥かに興味多いものとなって来る筈である」というふうにも未練がましく、日本語とアイヌ語との系統関係があってくれたらいいのになあということをいうわけです。そういうわけで、たぶん、歴史研究が大事だと言いながら比較研究をどうしてもしたかったのであろうかと思うわけであります。そういった意味では、日本帝国大学言語学の射程に存在しようとしていたわけですが、比較は成り立たないわけですので、では、どうかたちで存在しようとしたのでしょうか。日本語の位置の確定に直接関係がないわけですね、アイヌ語は。上田の構想の中においてはそれでは意味がないのです。そうすると、日本語にとっての比較言語学の資料とならなくても、歴史的に遡って古形を構築していくことこそが、科学的言語学であって、それ自体に意味がある、ということしかできなくなってしまう。そこで科学であるための、古形を構築する有効な手がかりとして、「フオルクロア」「神話伝説」を位置づけているわけですね。

同じ1927年の論文で、「ユウカラ及びオイナは……実際古語旧辞であって、時としては之を伝へてゐる古老でも、何の意味であるかわからない所である……」。私はそれを解説してきたと……。今生きている人の口から出てくるものであるけれども、それは今日の口語とは大分ちがっていて、昔のものである。口語の通じない樺太と北海道のアイヌとの間に、却って叙事詩のむつかしい方が通じる事もあると。「此は取りも直さず叙事詩の言語が今日の口語よりも古いものである証拠である。この事を発見したのが私の研究の出発点なのである」ということを言っているわけです。

叙事詩がアイヌ語の古形であることの証左であって、それによって初めて、文字がない言語の古いかたちがわかる。つまり、歴史がわかるということですね。歴史言語学の対象として、ようやく金田一のまえにアイヌ語が、そしてそれを研究するアイヌ語学がたちあらわれてくる、ということになります。

まさに金田一はユーカラを古代ギリシャの叙事詩になぞらえているわけでありまして、これは、新村の言う文学をもちいた歴史研究という議論と相同しております。それは「日本帝国大学言語学」のなかでの存在価値を獲得しようとしていたとみることできます。方言についても、1934年ですが、「樺太では日常語が北海道の雅語に共通している」と述べているように、方言に古い形をみだそうとしているわけでありまして。ただ、やはり、ある種のイデオロギーでありまして、古いものが方言とか叙事詩に残るということを言うわけですが、これは位相の差であるというふうには捉えないのです。古い、古いと言っても、一体いつごろの言葉なのかということが分からないわけですね。文字記録がないということで。それでは史の変遷は辿れないわけですね。何世紀ごろのアイヌ語がこういう状況であって、100年後のアイヌ語はこうだという史的な変遷は辿れません。つまり、「現在と過去」という目盛のない線があるだけであります。だから時代の目盛がないだけ、古代ギリシャになぞらえることも可能だったのではないかというふうに思います。

となれば、この叙事詩、ユーカラがなければ、今現在の存在価値は「日本帝国大学言語学」ととってももちろん、金田一にとっても無きに等しいものであることになります。だからこそ、アイヌ人が今話していることばを勉強してもつまらない、という発言が正当化されるわけですね。ユーカラがなければ科学の対象ではないのだと。科学としての言語学の対象ではないとい

うふうに金田一は言いきってしまっているわけであります。

話が変わりまして、「日本帝国大学言語学の展開」ということになります。明治末年の金田一を年譜で確認しますと、1905年3月と1906年7月に調査をして卒業論文を書く。ユーカラを筆録したりするわけですが、1907年の卒業後にアイヌの文学を初めて雑誌に載せるわけですから（1908年1月～3月「アイヌの文学」『中央公論』）。ここから金田一の研究者としての経歴は華々しく展開するともいえません。海城中学校の講師を嘱託されるわけですが、教員免許の不備があり、言語学卒業だと国語の先生の免許が取れないということが就職した後で分かるという間の抜けたことによって、半年で辞職したのです。三省堂編集輯所の辞書の編纂に携わるわけですが、一方で國學院大学の嘱託講師になります。このころ、石川啄木が上京して、いろいろな迷惑をかけたということになるわけですね。1909年に結婚もし、1911年に長女ももうけるわけですが、この長女は1912年に亡くなってしまうわけですね。その年にHenry Sweetという人の*The History of Language*の翻訳を始めます。これを『新言語学』と訳すわけですが、つまり「言語史」、訳せば「言語の歴史」ですが、それを『新言語学』というふうに訳しているところに、ある種金田一の言語学に対する捉え方があると思います。ただ、これも原文と訳を比較していきますと、日本の事例に置き換えたりしているところがけっこうあります。その顕著なところは、インド洋にあるアンダマン諸島のことばについて、「Even unlettered savages, such as a natives of the Andaman islands, have a traditional language employed only in poetry which differs considerably from the language of everyday life」と英語で書いてあるところを、「全く文字の無い野蛮人、例へばアイヌなどのやうなものにもなほ口伝への叙事詩があつて、その言葉は日常の談話の言葉とは大に違つてゐる」と翻訳するわけです。アンダマン諸島と言っても、読むほうにはピンとこないという配慮なのかもしれませんが、それを「アイヌ」というふうに置き換えていくわけです。意地悪く読めば「アイヌ＝野蛮人」ということを金田一自身が言っていることになるわけです。文字の無いのが野蛮か文明かを識別するという当時の状況もありますが、金田一のアイヌ観をはからずも露呈しているのではないかということが言えます。

この翻訳は1912年3月に脱稿し、翻訳料を前借りして衰弱きった啄木のために用立てているわけですが、啄木はこの本を見ることなく死去します。その出版は6月にされるのですが、そこには、金田一の全集にもない文章が出ています。たいへんな悲劇が襲ってきたということが書いてありますね。

私は生まれたばかりの子どもが死んだり、友達が死んだりとか……、ということが書いてあり、私は何のために学問をしたのか。何のためにあくせくしていたのかもわからなくなりました。ナンセンス！という言葉が書いてあるわけです。

つまり本のあとがきに相当するこの文章は、学への期待と希望をこめてかかれてしかるべきものなのでしょうが、学問への希望をも失いつつある31歳の金田一の胸中がここで吐露されるわけです。年譜によれば、父親が死んだ後、「憂悶、危くアイヌ語学を廃せんとする」とあります。この年の9月三省堂も解散し、國學院の非常勤講師だけで生活をするというどん底の生活を送ることになるわけです。

ところで、『新言語学』の「序」を見てみますと、金田一が上田の言う「日本帝国大学言語学」をどう展開していったのかということが、ここで見ることができます。「自序」、これは金田一

の言葉で書かれたものですが、言語の類型というのをそこで説いています。「曲折語・膠着語・孤立語」というのがあり、「曲折語」は「屈折語」と呼ばれるものです。さらに「抱合語」という四つ目の類型を出してきて……抱合語の例を求めると、「これも丁度日本には、アイヌといふ種族が話して国土の内に行はれてゐる。おまけに台湾には土着の熟蕃が孤立語を話してゐるので、日本といふ国はさながら世界各種の言語の見本を備へつけた、生きた図書館の観がある。実に言語研究の立場に於ては、日本人は生れ乍らに天与の特権をもつてゐるものである」と。

金田一は「膠着語」と「孤立語」が存在する場として「日本といふ国」をとらえています。その例示が、アイヌ語と台湾「熟蕃」の言語というそれぞれ文字化されていない言語であることにも注意しておくべきですが、「熟蕃」とは、台湾先住民諸民族のなかで漢族文化の影響がいちばん強いもの、そうでないものは「生蕃」と言うのですが、今ではほとんど言葉として残っていないのですが、ただの推論でしかないのですが、金田一の「熟蕃」の「孤立語」というのはたとえば閩南語の可能性もあるわけですが、それはともあれ、やや強引にふみこんでみれば、「生きた図書館」とか「天与の特権」といった表現からは、アイヌ語や「土着語の熟蕃」の言語は展示観察対象とする視線を抽出することができることがいえます。これは後でまた出てきます。

金田一はどん底の生活であつたわけですが、その生活からはいあがるきっかけが、「元号」がかわって1912年、大正元年10月の上野公園拓殖博覧会です。博覧会の研究というのはかなりあるので、何かの参考書をみればわかるかなと思つたのですが、この上野の拓殖博覧会はほとんど記述がないので、ちょっと困つてしまつたのですが、その博覧会は規模も小さかつたということで、あまり研究の対象になっていないようです。新聞記事を見なくてはいけなかつたのですが、ちょっと時間がなくて……。ただ、『風俗画報』に何回か記事が載っていました。その記事によりますと、拓殖博覧会は「台湾、朝鮮、関東州、北海道、及び樺太の新旧領土の実情を一般に紹介する目的があつた。」そういうことで、明治が終わり、獲得した領土の物産展といったようなものですが、そこにアイヌがやってきたわけです。インフォーマントがわざわざ東京に「展示」されにきたわけですね。その来場者が彼らと会話をかわすために金田一が坪井正五郎から依頼されたのが、『日本国内 諸人種の言語』というものでした。簡単な会話ができるような単語集なんですけど、「北海道アイヌ語、樺太アイヌ語、オロチョン、ギリヤーク、台湾生蕃タイアル語」の対照となっています。「オロチョン」とは正確にはウィルタのことですが、この作成のために金田一は「展示」の時間（8時から18時だそうですが）でない夜間に訪問して、本の作成とかつて筆録した樺太アイヌの叙事詩の疑問点などをただしていったわけでありました。ですから、金がないから調査に行けないわけですが、たまたま、この拓殖博覧会があるということで東京へインフォーマントがやってきて、それで研究が進むということです。つまり、「生きた図書館」の閲覧者になつたということです。この『日本国内 諸人種の言語』は東京人類学会から刊行されるわけですが、奥付によれば刊行は11月20日で、博覧会自体は11月29日までだったので、実際のところどれだけ使用されたのか、疑問ではあります。ともあれ、ここでのアイヌとの邂逅により、その後、金田一の調査のネットワークが広がっていくわけです。その博覧会に「展示」された北海道日高のコポアヌの紹介でワカルパを東京へ招きました。そこでユーカラを筆録するわけです。ワカルパ翁は二度と来れなかつたのですが、コポアヌは何度

も上京して、インフォーマントになってゆくというわけです。拓殖博覧会という、近代日本の植民地主義を象徴する場が、金田一の転機になったということは極めて象徴的ではなからうかと思うわけです。

この『日本国内 諸人種の言語』の付録『世界の言語と今日の日本』というところにも先ほどの『新言語学』と同じようなことが書いてあります。「四つの典型」としての「抱合語」をあげています。「日本では、アイヌ人の言葉に、こうした習慣が存しています」「学者によっては、今一つ南洋のマライ語を建てて五大典型とする人もいます。此は台湾の生蕃、タイヤル語」つまり Malayo-Polynesian 系の言語ですが、それが属するというわけです。

「こう見てきますと、日本はどうやら世界のあらゆる言葉の見本を備へ付けた博物館の観があります、而も、此度の此博覧会の催して此等の言葉が一堂の下に寄り合つて生きた口から話されてゐます。実に前代未聞のことで」……ということです。

上田万年の構想した「日本帝国大学言語学」は、金田一によって「世界各種の言語の見本を備へつけた図書館或いは博物館」を統御するものとなった。ちょっと言いすぎかもしれませんが……。上田は日本語の位地を系統的に決定しようとしたわけですが、その現実の困難を自覚した金田一は、系統論には直接関連しない類型論を持ち出してアイヌ語の位置を示そうとしたというふうにみることができます。

しかし、金田一はこうした博物館や図書館になぜなったのかというようなことは、いっさい考えておらず、植民地支配領域の拡大を所与の前提として、そこにアイヌ語を配置していったというわけであります。ちなみに、この時ワカルパ翁から筆録したユーカラが10冊分にもなったと聞いた上田は、当時『古事記』序文において稗田阿礼の暗誦を筆録したことに対する疑義があったわけですが、つまり、あれだけ記憶することはできないのだという疑問がありました。しかし上田は、ユーカラがこのことへの強力な反証になる、とのべたといっています。ですから、上田にとってはアイヌは参照項にすぎなかったのではなかろうか、ということも言うことができます。

終わりにになりますが、こうして上田の「日本帝国大学言語学」の意図を展開し、「生きた図書館」として帝国日本内部の諸言語を配置しなおした金田一は、史的研究こそが言語学であるとして以後も研究をしていくわけであります。金田一にとってのアイヌ語学とは、史的研究以外のものではなかったのです。これは繰り返し、繰り返し金田一が言っておりまして、記述文法よりも歴史文法を重視するという立場もとっているわけですね。これはアイヌ語についても同じようなことを言っております。

そうした枠組みをつくった後で、知里幸恵と出会うことになるわけです。1918年6月です。知里幸恵は1922年上京し、同じ年に亡くなるわけですが、先ほどのお話にありましたように、ふつうはインフォーマントというのは自分では書かないわけですが、自分でやってくれたというのは、研究者にとってこれほど楽なものはない。自分で思考し、自分で記述するという、とても理想的にすぎるインフォーマントであったわけです。言語学というか、科学のために身をけずって死んでしまうわけですが、たしかに、金田一と出会わなければ東京で死ぬことはなかったでしょう。

それをふまえて金田一の姿勢を批判することはきわめて簡単であります。しかし、当時の言

語学の科学性に忠実たらしめた結果だというふうにもみことも可能であります。金田一だけが「悪者」ではなく、当時の国語学の方言に対する態度とも通低しています。

私の『＜国語＞と＜方言＞のあいだ』という本で書いたのですが、方言は標準語の普及にとっては障壁ではありますが、国語の歴史をたどるには不可欠な要素でした。方言の中に古い国語が残っているというかたちで採集の対象にしているわけですね。ですから、国語学が欲したのは方言話者ではなく、方言そのものでしかなかった。同様に言えば、金田一のアイヌ語学が欲したのは、アイヌ語話者ではなく、アイヌ語そのものでしかなかったと。

言語学はやがて言語史である、というパウルのテーゼから自由になろうとしたのは、実は国語学者でも言語学者でもない人なのです。佐久間鼎という人がここで突然出てきますが、彼はゲシュタルト心理学を導入した人として知られているのですが、一方ではアクセント研究をしていたのです。東京語のアクセントの体系的な研究が有名です。あるいは「コソアド」の体系を「場」の論理から説明した人でもあります。

佐久間が1931年の論文では、パウルへの主張への懐疑から始まって、「言語史だけが言語学ではない」と、もとめるべきは「説明科学としての言語学、法則定立の学としての言語科学に外ならない」。つまり、そこにあるものをそれとしてみていくことで、歴史研究ではないのです。そこに話されているものの中に、法則を見出していく。これはこれでいろいろな問題が出てくるわけです。言語研究とは「現前の話すところの事態」を「克明に観察し記述」するなかで原理を究明していくべきだということを佐久間は主張して、「東京語」の話し言葉を観察対象にして、アクセントから文法にいたるまで、体系化を行なってそれを「日本語学」というふう積極的に称したわけですね。つまり、「国語学」ではない。「日本語学」だということです。日本語学は、植民地や占領地における言語教育にとって不可欠なものであって、常に転用されていくわけですが、ただ、こういうふうには歴史言語学に傾斜して、現前する言語変種の記述を等閑視していた国語学内部からは、佐久間のような考えは生じようがなかったわけであり。ともあれ、1930年代になってこうした主張があらわれてはきたわけですが、アイヌ語学については知里真志保をまたねばならなりません。知里真志保のアイヌ語の記述が正当なものかどうかというのは、次の佐藤さんのお話につながると思います。

先ほど丸山先生が引用されました知里真志保『アイヌ語法概説』(岩波書店、1936)に金田一が序文を寄せていますが、そこでは今話されているアイヌ語についての文法書がなかった、なんと不甲斐ないことであったであろうと述べています。確かにこれは奇妙な話ですが……ちょうど手ごろなすぐに間に合うアイヌ文法のテキストがなかったが初めて知里真志保によって書かれたということを行っているわけです。

冒頭に戻りまして、金田一が「アイヌ人が話している言葉はアイヌの口真似をしてしゃべるようになる程度の勉強だったら、つまらないのみならず、実際上の必要はもはやなかったのです」と言えたのは、彼の信じる言語学がそこになかったからです。現代の言語学者がこうしたことを言うことはないと思いますが、今「言語権」とか、少数言語の権利というもの重視され、言語学もそれに従って研究を進めて、「絶滅の危機に瀕した言語＝危機言語」の研究が注目されているわけであり。ですから、金田一の発言を批判することはたやすいわけですが、当時の言語学の性格も合わせみずしては、批判は完成しないと思います。今現在少数言語の言

語権を主とすること自体が絶対的な善であるかどうかということについても、やはり検討しなければならないわけであって、批判の矢はブーメランになり自分に返ってきてしまうものもあります。他人事のように言いますが、私のほうへ批判が返ってくるのではなかろうかと思って話を終わります。ありがとうございました。〔追記：本報告は安田敏朗『日本語学は科学か』（三元社、2004年）のなかでもう少し詳しく論じた。参考文献などの情報はこちらをごらんいただきたい〕